

熹平石經概説の狗尾

岡 井 慎 吾

私は昨年五月中、偶然漢石經についての知識を纏める氣になつて些やかな物を記した。勿論世に公にする考など無いから、其のまゝに篋底に藏した。然るに本誌の昨年八月號に渡邊氏の漢熹平石經概説が載せられたを知りて奇しきことかたと感じつつ、直に岡田希雄氏に願つてこれを借讀した。渡邊氏は誠に精詳な物で、特に最近出土に關する有らゆる材料を利用して居らるゝ點は見聞寡陋の私などの夢想し得ぬ所、この概説は私の蒙を啓く爲に書いて下さつたのかと思ふ程に感謝した事で有る。但し私の既に記した所で概説を補ふに足るかに思ふ者も若干あるので其を拾ひ出して狗尾とすることを渡邊氏は容さるゝだらうか。

一

石經建立の原因は概説第一節に詳述せられた通で、同第二節に

及碑始立、其觀視及筆寫者車乘日千餘輛填塞街陌矣

と有る如くに其の目的は充分に達せられた。然るに此の目的以外に偶然にも此が又字體の統一に役立つた事を看過してはならない。

秦初に字體が篆より隸に移ると俱に書寫の諸材料も亦變化したから忠實に篆形を組立つるまゝの點畫を應用することには幾多の不便を感じたらう。こゝに必然的に點畫の省減が行はれる。官府の文書としては

吏民上書字或不正飢舉劾(漢書の藝文志)

の制裁も有つたらうが、個人の日常書寫の間には勝手／＼に省かれ減ぜられたに違ひない。かの萬石君の石奮の子の建が

奏事下、建讀之驚恐曰、書馬者與尾而五、今迺四不足一、獲譴死矣

と恐縮したのは有名な話だが、馬の字には點を四ツ打つべきを三ツに止めたも亦當時の書寫の略體だつたらう。兩漢四百三十年(皇紀四四五—八八〇)を通じての省減の積り積つた結果は定めて非常に區々な物だつたと想像せられる。

此の餘りに區々となつた字形に對しては自然の要求として或る標準によつて之を歸一せしめたいの念が動いたに違ひない。偶々石經が官府の力を背景として建つた事は此の役目を負擔するには恰好の物で有つたから、直に此の要求に應ぜしめられ、事輻千餘乘の筆寫者の中には經文の正を取る者と俱に字形の標準をここに求むべく毫を舐めた者の少からざりしを信ぜられる。

某々の字形は石經を標準として定まつたとは唐代までは明かに傳へられたと見える。唐の張參が撰んだ五經文字には

築 楠 樓 榘 得 復 𠂔

など七十二字を出して、石經の字形として説文の即ち篆形と相比べて有るが、其の大部分は今日の通用の形となつて

居る。同書には又説文體に對する石經の字形の如くに、説文體に對して經典相承字體と云ふをも百四十五字、同書の續編とも云ふべき九經字様に百三十八字を出して居る。此の三百字は石經體とは別途の如くにも考へるが、石經以前の經典相承の字體が前に考へた如く亂雑だつたとすれば此く一定した相承體が成立つにも陰に石經が役立つて居るべく、五經文字九經字様の著者が此く書き別けた理由は今日より知る由もないが、此の三百五十字が程度の差は有つても石經と風馬牛では無からう。

抑々五經文字九經字様の兩書に收録したのは三千三百六十九字で有るに、上に述べた如く三百五十字は陰に陽に石經に關係ありとすれば其の割合は1/10強に當るから、石經が字形統一に貢獻せるや亦大なりと云はれる。

石經體と明示した材料は管見では慧琳の一切經音義に若干見出される外には殆ど無いやうだ（汗簡にも石經として引いて居るが其は篆形だから漢石經が隸體のみと論定せられた今日には此の稿の材料たるを得ぬ）。音義のを二三引くと

蛇 蔡邕石經加虫作一 卷六ノ一五

爵 石經改阝作四、改刀爲寸 卷十一ノ十一

秦 蔡邕石經隨俗作一 卷十四ノ二

△（大の下に隹の下に又） 蔡邕石經從寸作秦 卷十四ノ十八

の類で、之より推して

前 正體從止從舟作B（止の下に舟）。説文不行而進謂之前、止在舟上也。蔡邕加く、く水也、 卷一ノ三

從止從舟、蔡邕加く音青外及、く水也可以行舟、 卷一ノ十

熹平石經概説の狗尾（岡井）

50 も亦石經に見えたものと信ぜられる。抑々前の字たる、説文では

B 不行而進謂之——从止在舟上——段注後人以齊斷之前爲——後字、又以羽生之巽爲前齊字

C(Bの右に立刀) 齊斷也、从刀B聲

D(止の下に舟と羽とを並べて) 羽生也——段注羽初生如前齊也、前古之巽字、今之B字

と有りて、前の形は齊斷の義として居るが、音義によると齊斷の義のは刀に従つたらうが前後の義のはく即ち水に従つたので有る。此の二つを混じて今の前後の字をも齊斷の義の字の借用と見るは誤とせねばならぬ。けにや水即ちくを加へるは説文で云へば、

兪 空中木爲舟也、从△从舟从く、く水也

に見ゆる所だから、蔡邕が水に縁あるBにくを加へたは亦許さるべきだらう。乃ち段氏の考は今日は是認せらるまい。

之を要するに石經が字形の統一に貢献した事は看過すべからざる所で有る。

二

私は又石經の拓本が再び石に上せられた事、清朝にはいかに流傳したかなどをも調べて見た。骨董じみた話だが、老人にはふさはしからう。

初め洛陽に建てられた石經は一たび鄴に移され、再び洛陽に復され、更に又長安に移された事や、隋の開皇中(一

營造之司因用以爲柱礎

のみじめな運命に弄ばれた事や、唐の貞觀の初(二二八七)には

秘書監臣魏徵始收聚之、十不存一

の如く保存の氣運が動いた事やは概説第九節にも既に述べられた所である。唐代既に此く希有の物となつたのだから宋代(二六二〇)になると倍々乏しきは自然の數で有る。一方宋代は金石の蒐集研究の大いに興つた時代で有るから石經への關心も厚く既に上石の事が有つたと見えて胡宗憲の成部西樓本が著録せられて居る。宗憲は普陵の人、北宋の神宗の代(一七二八―四五)に知成都府だつた士で、西樓とは成都府の轉運司の園を西園と稱した其の園中に在つたものと四川通志に見えて居る。胡の重刻石經遺文の跋に曰はく

茲來少城得摩刻於一二故家、因以鑑之錦官西樓、庶幾補古文之缺云爾

又宇文紹奕の跋には

內翰胡公合諸家所藏得蔡中郎石經四千二百七十字有奇、以楷書釋之鑄諸石永貽不朽

と有る。之を後に述ぶべき隸釋所收の千九百餘字に比すると二倍の量に上るが、隸釋にも

今京華鞠爲甃園之鄉、殘碑日益鮮矣

と有る如く、汴京より臨安へと播遷したどさくさ紛れには自ら散佚亡滅したものと見える。

文献は南北宋の交に於て俄に多い。其の一二を引くと黄長容の東觀餘論には

熹平石經概説の狗尾(岡井)

張氏龍家有十版最多。張氏培家有五六版。王晉玉家有小塊。洛中所有者止此、予皆得其拓本。

董彥遠の廣川書跋には

國初開地唐御史府得石經十餘石。又嘉祐中（一七一六—一二三三）居民治地得碎石、洗視乃石經。

姚寬の西溪叢語には

往年洛陽守因閱營造司所棄碎石識而取之、凡得尚書論語儀禮合數十段。又有公羊碑一段在長安。

邵博の聞見後錄には

近年洛陽張氏發地得石十數、漢蔡伯喈隸尚書禮記論語各已壞闕。

と有る。黃は北宋の季の政和八年（一七七八）に亡くなつた人、董は同じき靖康（一七八六）に司業に官した人、又姚は舜明の子で其の舜明は紹聖四年（一一七五）の進士、邵は邵康節（一一七三）の孫だから、この二人は寧ろ南宋の初と見て差支ない。

南宋での上石は普通に二種とせられる。一は上に述べた隸釋や隸續の著者たる洪适（一一八四）の蓬萊閣本で、其の跋に

蔡中郎石經在承平時已不多見、今京洛雖爾慮其遂泯沒不傳也、予既輯隸釋、因以所得尚書儀禮公羊論語千九百餘字鐫之會稽蓬萊凡八石、庶幾見者有竟然之喜

と云つて居り、隸釋には乾道三年（一一二七）の序が有るから、上石は其の後だらう。其の隸釋に上に云つた成都西樓本を材料として居られぬ爲に四千三百字が半分弱に減じたは惜しむべきだが、成都と會稽とだから連絡が無かつた者

だらう。

一は越州石氏で其の博古堂帖に收めたもの。此の帖の目は寶刻叢編に出して有るが、周穆王の吉日癸巳の次に蔡邕石經殘字と有る。石氏名は邦哲字は熙明、會稽の人、紹興三年（一七九三）に大理評事となつて居るから洪适よりは先輩で有る。洪适とも深い關係有つたは隸續卷第四の晋右軍將軍鄭烈碑の釋の後に

稽山石邦哲熙明聚碑頗富、今亡矣。假之其子祖禮、諸石有固門莊間兄弟亦出其所藏、故能成書乎越

と述べて居る程だ。この石氏儲藏の來歴は施宿の嘉泰會稽志に

尚書石公弼（大觀中に御史中丞に官した人）藏書、其後頗弗克守、而從子大理正邦哲盡以金求得之、於是爲博古堂帖と有るによりて明かだ。

この兩刻は寧ろ石氏本が前かとも思はれるが、清の翁方綱は漢石經殘字考に於て

石氏所刻石經與洪氏蓬萊閣本、其時當不相遠也

と云つて居る。

三

清初に存した漢石經としては顧炎武が其の金石文字記に於て

予兩見此本、一於鄧平張氏、一於京師孫氏、尚書盤庚篇三十餘字、論語爲政篇七十餘字、堯曰篇三十餘字

と記して居る。この鄧平張氏を或人から張一元だらうと教へて貰つたが、一元は明の隆慶の進士で清初よりは約百年

熹平石經概説の狗尾（岡井）

も前だから、其の家に存したとすれば顧炎武は其の後人より見せて貰つたのだらう。鄒平の張氏としては今一人を中國人名大辭典に收めて居る。即ち張實居で、この人は

順治時卜居大谷、彈琴詠歌以自娛

と有るから、石經を藏する様な人なりや否やを知らぬが、順治と有る點は顧炎武と相近い。然るに此の張氏のは其の後いかになつたか更に物に見えぬ様だ。

京師孫氏と云つたは北平の孫承澤たるべく、其の庚子銷夏記卷五の蔡邕石經殘字の條に

宋初開地唐御史府、得石經十餘石。又嘉祐中居民治地得碎石、洗視乃石經。此本蓋彼時所捐也。雖所存僅百十餘字、然先正典刑具存真希世之珍也。予裝之硯山齋秘笈中

と記して居る者。朱竹垞も

漢石經遺字猶有捐本存者、余嘗見宛平孫氏所藏、雖經文無多而八分古雅定爲漢隸無疑也

と云つたが、何義門は

退翁所藏乃越州石氏摹本

と見て居る。南宋より清初まで五百年、拓本か帖の零片かも知らぬ程になつたと見える。この孫氏のは華亭の王鴻緒に移り、孫星衍は嘉慶十一年（二四六六）に歷下の何氏より之を得て大に喜んで左の詩を賦した。

題憲平石經捐本次翁閣學方綱讀

憲平經石立千載 硯山孫承澤主人去百年 摩挲捐本玩殘字 吉黃片羽欣流傳 虎賁相對故宛爾 靈光猶在仍蔚然 北平閣學孫氏今退谷 研經閉戶窮遺編 搜奇快觀古汲冢 博物不數張茂光 漢碑唐刻嗟不爽 如以寸晷知義經 長篇連讀題爲我 裝用貝錦重龍

開成尙見碣排比 鴻都空想車讀填 秦賦佳拓證經本 此刻後得如珠聯 殷庚今文魯論句 箴砭俗學語相沿 不其或廼孝于孝
片語可抵經文全 洛陽碑石懷復出 魯王壁簡應重詮 同文況值聖人代 辟雍特建波廻圓 篆書若借少溫手 老屋更補尙書篇 如
公蒼鴻在厥服 好結翰墨非常緣

この殷庚今文云々の四句は石經に不其或廼自怨とあるを今本に不其或稽自怒に(殷庚中)、書云孝于惟孝とあるを今
本に書云孝乎惟孝(通語)に作れるを指したので、此く文が異なれば意も亦同じからず。姑く論語について云へば爲政
には

書云孝乎惟孝友于兄弟施於有政

とありて乎于於おの／＼同じからず、而も書の君陳には

惟孝友于兄弟克施有政(孝乎の三字無し)

とさへ有るから、倍々此の三句一列の句法たるが知られぬことゝなつた極、朱注には

「書云孝乎」著言書之言孝如此也

とさへ讀むに至つたが、石經の如く

孝于惟孝友于兄弟施于有政

と右れば三句一列たるは火を睹るよりも明かで片語と雖も眞に貴むべきだと云ふのである。

さて孫の歿後右は南匯の沈樹鏞、漢陽の萬航を経て端方に歸した。

孫星衍のが沈萬二家を經て端に歸したとは張國淦の歷代石經考に據つたのだが、翁同龢や羅振玉は吳大澂恪齋に歸

茲平石經概説の狗尾(岡井)

したと云つて居る。翁吳は殆ど同時だから誤らるべくも無いから、張氏のに吳を逸したのかと思はれる。

又顧氏は述べて居らぬが、蒙古文の印を録した一種が有りて、清に入りて馬日璐の玲瓏山館に存して漢軍の董元鏡に移つたのを錢唐の黃易が借覽した。たゞ董は其の女を縁附けたので黃は白金數十兩を以て其の險具を置いたが董は之を償ふに由なく遂に石經を以て黃に貽つたは乾隆四十二年の八月。この黃氏のを翁闡學方綱が見て海鹽の張燕昌に石に勒せしめ、なほ左の漢石經殘字歌をも作つたが、其はやはり乾隆四十二年のこと

熹平初作皇義篇 石渠故事追孝宣 通經釋義事優大 文武之道非丹鉛 雕蟲篆鳥那比數 鴻都未立前三年 議郎意不在工畫 蓋以正誤代傳箋 蘭臺漆書敢私易 煌々日月常中天 四十六石堂十丈 聚觀軍兩爭駢闐 楊家略著洛陽記 宋初尚有斷石傳 東觀論出御史府 論語跋記董廣川 成都會稽各搜匿 洪相八石精摹鐫 因依破缺非貌古 太璞粹氣逾于全 吾鄉孫氏視山笈 南原墓本殊不然 隸原隸辨榮與籀 毛槧黃槧烏非焉 鄒平復聞張氏本 硯山又落吳淞船 義門每用識退谷 奔藏鑒別相後先 盍毛包周證魯義 歐陽夏侯訂孔編 越州閣圯海水緣 柯亭桐鏤朱絲絃 玉邵半圭虹貫斗 龍鎮百寶珠騰淵 崑山顧亭林四明 虞余野各有考我欲策縑無由緣 便當摹勒自此始 涓涓留且尺硯穿 乞名蓬萊扁小閣 賀梁語燕來翻々

之が孫星衍の次韻した原作たるは無論だが、次韻と云つても原の韻字にはよらぬもので、普通の和韻になつて居る。此の黃氏のも亦沈樹鏞、萬航を経て端方に歸した。

今一ツ蔡嘉字は松原の藏した物も有る。蔡は

丹徒人、能詩善畫亦玲瓏山館座上客也

と江藩の漢石經殘字跋に有る。之は阮元に移り、南湖漁者を経て亦端方に歸した。

羅振玉は阮元が得たのは後に述べる錢泳の所藏の一部で蔡氏のものでは無い。其の證には紙筆錢氏のと同じく且つ蔡

氏の一字一歟も無いと云つて居る。

此くて端方には孫氏の、馬氏の、蔡氏の三家のが並せ藏せられたが、端方の歿後は滿洲の衡永氏に歸したと云はれる。さて此等の内容として顧炎武が字數を算へたのは既に引いたが、翁方綱は兩漢金石記に於て

漢石經殘字尙書盤庚篇五行、論語爲政篇八行堯曰篇四行

と記した。而してこれらは全同かといふに孫承澤蔡松原の藏本には般庚の凶德綏績(今本では凶德嘉績に作る)の四字だけ黃易のより多くなつて居るを異なりとする。初は同一の物でも裝潢を経る間には剥落は免れぬから、孫蔡の兩者が既に同じき以上

焉有東漢元本至千數百年後恰在兩家同一文者乎、是其爲後人摹本可知矣

と兩漢金石記に記したは動かぬ議論だらう。

四

この三家の外に句吳の錢泳が更に多き内容の物を得た。其の履園叢話卷九の漢熹平石經の條に

余於乾隆五十年七月偶於書肆中購得舊本管子一部、中夾雙鉤五六紙、率皆殘闕不全。細心尋繹得

尙書洪範篇七十八字

君奭篇十三字

魯詩魏風七十三字

唐風三十一字

儀禮大射儀三十七字

熹平石經概説の狗尾(岡井)

聘禮二十八字

公羊隱公四年傳十八字

論語微子篇百七十字

堯曰篇三十九字

盜包周有無不同之說(九字)

博士左立姓名(十八字)

合五百餘字。不詳何人所纂。惟視管子第一本上有國初徐樹丕印記、則知爲牆東老人所鈎無疑矣。

と記して居る物。堯曰は重見するが、一石が上下二截となりて、上截三十二字が他家に、下截三十九字が此の錢氏に存するのだから、何れも上に述べた三家のよりは別の物で有る。然るに錢氏は又其の尙書洪範の拓本の端に

余得漢石經殘字宋凡揭十三紙

尙書三 毛詩二 公羊一 儀禮二 論語四 論語毛詩合刻並題名一

記して居り、此の數は叢話よりも尙書一論語二を増して居るのは怪しい。而も又今日錢氏のとして傳はるものは叢話に記した者よりも微子篇が缺けて盍毛云々と博士云々とが一石になつて居るのですべて九紙で有る。

この錢本は光緒十二年(一五四六)に翁同龢に歸したが、翁は之に跋して

紅羊之厄由居士、後人出諸劫火中已佚去四紙止存九紙。

と云つた。そこで羅振玉氏は

細檢之則所佚正是尙書一論語三、始知錢氏懼勢家奪之又貧不能久守、乃割其諸家所有之四紙售之、自留其九紙云々、則翁氏謂其子孫失之、殆不免爲梅花亭長所語矣。

と想像せられたが、尙書一は盤庚としても論語の三は爲政と堯曰（上截）との外の何だらう。叢話によれば微子らしくも見えるが其は諸家所有でも無く、一方で叢話に盤庚を載せぬ振合から云へば若し微子ならば之も記さるべきで無からうか。かたゞ、佚し去つた四紙はまだ分明で無い。且又羅氏は此の佚去の分が即ち阮氏の藏となつたと見られたが、羅氏は

此三孫阮黃本皆殘字四段、尙書一論語三存字均百二十餘字（宋拓熹平石經跋）

と云はるゝに於て顧炎武や翁方綱よりも異なつて居る（論語三が果して微子を含むならば叢話に微子のみを百七十字と算へて居るから、存字均百二十字と撞着する）。

民國革命の際に南中故家の所藏は大半流出したが、翁氏のも其の運命を辿つて劉體乾に歸した。乃ち羅氏の盡力で吾が大阪の油谷博文堂より影印本が大正二年に出た。尤も曾て翁方綱によりて摹刻せられて南昌郡庠にも置かれたので有る。所が今日は錢本は贋作と論定せらるゝことゝなつた。新出土の石經では詩の每章に其一、其二を註して二字分を占めて居るのに錢本では一字を明けては有るが其の註が全く缺けて居るは漢石の通例に符合せぬから有る。又石經の毎行の字數が今日は分明となつたので、此方からも字配りの怪しむべき點を發見するが、是には石經に用ひた魯詩（概説第六節往看）と今の毛詩との間に字數の相違が有つたとも云ひ通れられるから之を用ひぬとしても、詩の切れ目の註の缺如せるは此く斷定すべく充分で有る。但し其は錢氏のさがしらか、錢氏も亦欺かれた一人なるかは定められぬ。叢話に記して居る徐樹丕は字は武子、明の長洲の人、善楷書兼工八分と傳へられるから或は其の手に成つたのかも知れぬ。

かゝる作者の技巧的特徴を觀察する爲に最も便利なる手懸りを、吾々は物語の極めて顯著なる重點ポイントをなす短歌に於いて見出したのであつた。即ち此の物語の短歌は、或る場合は物語の起結に於いて現れ、又或る場合は、一つの事件の終末に、次に起るべき事件への楔として、更に、物語の中心部を形成するものとして現れてゐる。又或るものには一つの歌を核心にする小話の集りといふ極めて原型的なる手法も見られるのである。かゝる短歌の挿入法は、其等が情緒の點に於いて戲笑の要素を含んでゐるのと同様に、全體の效果の上から明らかに意識的に行はれてゐるのである。而して短歌をかくの如く意識的に挿入する事を可能ならしめてゐるのは、實に此の作者に獨特の構想の明確さにあると考へられる。構想の問題は改めて具體的に研究されねばならないものであるが、それは歌を中心にした吾々の上の考察によつても略々推測しうるものと思ふ。而してかくの如き構想の明確さが、此の物語をして、短篇と長篇との違ひはあれ、徒らに前代の物語の糟粕を嘗めて筋の錯雜のみを需めた他の概ねの擬古物語から斷然頭角を現さしめてゐるのである。